

2019年度 学校評価自己評価 2020.3.31

1. めざす学校像

<p>大阪女学院の建学の精神 (ミッションステートメント/2009年9月15日制定)</p> <p>大阪女学院は 創造主を畏れ キリストの教えに従って 一人ひとりを受し 何が重要であるかを見抜く力を養い 喜びをもって 進んで社会に仕える人を育む</p>	<p>大阪女学院が育もうとする学生・生徒像</p> <p>*キリスト教に基づく愛と奉仕を実践する人 *自由な学びの中から、物事の本質を見つめ、自己の進路を選ぶことのできる人 *英語力を基礎に幅広い教養と公正な判断力を身に付け、自律的・主体的に行動できる人 *性別の役割にとらわれずあらゆる可能性に挑戦し、女性の尊厳の確立に努め、リーダーシップを発揮する人 *社会の課題に関心を持ち、世界、日本、地域のために仕える人</p>
---	--

2. 中期的目標

<p>運営基本方針 (2014～2019年度/Ⅰ期及びⅡ期中期計画において)</p> <p>グローバル化の進展に伴う市場原理による競争主義の台頭により、我が国においては、経済をはじめとして社会のあらゆる分野における既存のシステムの変革が迫られている。さらに、「知識基盤社会」における「知」は容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりを持つことは論を待たない。大阪女学院は、このような環境変化に的確に対応するとともに、130年間にわたって育んできた精神を堅持し、2014年度から2019年度において、次の方針によって、健全な運営を創出する。</p> <p>*教職員の知恵と力を結集して、歴史と伝統に証される良き学校運営を継承する。</p> <p>*これまで育んできた学生・生徒像、人格を育む教育力、積み上げてきた教育・研究活動の成果を広く社会にアピールし、学生・生徒の安定的な確保に力を注ぐ。</p> <p>*本学の建学の精神を実現するために変化しなければならないことについては、強い決意をもって迅速な対応を行う。</p>	
---	--

<p>Ⅰ. 建学の精神と教育理念の実践 < 2019年度事業計画より ></p> <p>1. キリスト教に基づく人間理解の深化</p> <p>大阪女学院中学校・高等学校は、女性が一人の人格として、何らかの方法で働く義務を悟り、正直に仕事をするを誇りとし、日常生活の雑事を越えて、物事を見抜く力をもつ人間を育むことを目指す。宗教教育については、長年の実績を踏まえた上で、キリスト教に基づく人間理解を深め、一人ひとりがかげがえのない存在であることの自覚を促し、生徒自らの生き方と他者とのかかわり方を学ばせる。</p> <p>また、入学後、保護者に対しても、学校への理解を深めてもらえるよう努める。</p> <p>2. 建学の精神の再認識と再構築</p> <p>本校生徒、教職員の誰もが自分の内面に向き合う礼拝の時間を大切に、祈りの中で他者に使える志を涵養することで、国際的なミッションによって設立された女子教育機関という建学の精神を再構築していく。</p>	<p>Ⅱ. 教育の内容と学習支援の充実</p> <p>教育理念を具現化するため、自身に与えられた賜を活かし、社会に貢献するために生涯学習を通じて学習を続け、成長をしていくことの出来る「真の学力」～学力、協調性、人権意識、規範意識、国際性～の習得を目指す。</p> <p>国が示すグローバル人材の育成、高大接続改革等は、創立以来本校が目指してきた教育理念と重なり合うところから、探究型・教科横断型・アクティブラーニングへの移行に積極的に取り組む。</p> <p>また、本校は国際バカロレア日本語ディプロマ(以後 IB・日本語 DP と表記)の認定校となり(2018年2月)、2018年度高校入学生の2年次に DP がスタートした。このワークショップに専任教員全員が参加することを目標にし、学校全体の今後の改革につなげていくことを目指す。</p> <p>1. 学力向上の取り組み～新しい学力観への対応</p> <p>学力についての考え方が「思考力・判断力・表現力」及び「意欲・経験・多様性」を重視する方向に大きく転換していく現代、本校が従来から行ってきた国際的な視野と主体性を育てる教育活動をさらに進めていく。また、先進的な教育活動を研究し、導入する。</p> <p>(1) 自学自習、自己管理力の養成…0J ダイアリー、学習計画書の活用</p> <p>(2) 論理的思考力の育成…中1・2「論理エンジン」の導入、中3探究型課題学習(2018年度からスタート)</p> <p>(3) シラバスの検討・改善…教科学習のシラバスの見直しとともに・宗教・人権学習・ボランティア・クラブ活動・生徒会等の活動を関連づけ、総合的なプログラムの構築を目指す。</p> <p>(4) 英語科、英語教科としての英語改革…高2英語科対象EPAワークシート授業の継続、発展。4技能英語外部検定取得の体制づくり(高1・2への speaking の導入)</p> <p>(5) 「国際特別入試制度」(中学2015年度入試より)の継続と発展…入試広報に努め、この制度による入学生の学習プログラムの整備を進め、国際理解教育を推進する。</p> <p>(6) 国際バカロレア日本語 DP 候補校として認定校を目指し、探究型・教科横断型の授業を展開する為に全教職員で学びを進める。また海外への進学を含め、世界を視野に入れた進路指導を行う。(先述の通り2018年2月に認定校としてスタートしている。)</p> <p>(7) 高等学校普通科理系の2コース制の導入…受験生及び中学内部進学生のニーズに応じて開設した理系1類、2類を充実したものとし、希望進路を保障できるよう整備する。</p> <p>2. 国際理解教育の推進</p> <p>留学や留學生との交流を通じ、言語への関心を深め、言語や文化の違いを知ることで、世界に目を向け、広い視野をもって物事を考える生徒を育てる。YFUの年間留學生受け入れに加え、オーストラリアの Ravenswood 校(姉妹校)との交換留学、カナダのオタワにある Longfield Davidson 校(姉妹提携校…これは2019年度をもって姉妹提携校としては発展的解消とすることになった)、YFU 韓国 からの短期交換留学(1ヶ月)との交流を通して、国際(異文化)理解に取り組む。また、交換留学制度を利用して、留学を希望する生徒の支援をしていく。</p> <p>高等学校3年間で実施している現行留学制度(夏期海外研修・短期留学・年間留学)に加え、2016年度にスタートした高等学校1・2年時3学期に実施する中期留学制度の充実を図る。</p> <p>3. 生徒・教員の人権意識を深める取り組み、生徒の心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援</p> <p>「私たちの人権感覚を問い直そう ～一人ひとりを大切にしよう～」を目標に人権学習に取り組む。</p> <p>人間関係を構築する力の育成 ～ルールの遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる他者理解～に努める。SNS を利用の知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。</p> <p>4. 学校行事による集団づくり。さまざまな行事への生徒の主体的な関わりにより、集団の中で自分を活かして協調性、創造性を育む。</p>
<p>Ⅲ. 教育の実施体制の改善</p> <p>1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み</p> <p>(1) 広報の充実 (2) 説明会・学校訪問への全教員での取り組み (3) 入試対策室の充実 (4) 中学「国際特別入試制度」の継続と発展</p> <p>2. 組織改善の取り組み 一貫教育充実のため、中高6年を偏りなく経験できる人事、世代交代を見据えた指導理念・スキルの継承のためのベテラン教員の人事を行う。</p> <p>3. 中学・高校としての図書館機能の充実 (1) 蔵書充実 (2) 利用教育 (3) 図書委員会活動 (4) 広報の充実 (5) その他、タブレット端末活用の授業の為の環境整備</p> <p>4. 教員の人材育成 (1) 建学の精神及び世界の変化・課題についての学び (2) 支え合う組織づくり (3) 他校との連携 (4) 新しい学力観・授業形態への対応 (5) 人権意識の向上</p> <p>5. 中高大短連携プログラム (1) 宗教・解放プログラム (2) グローバル進路 (3) 大学院との合同プロジェクト</p>	<p>Ⅳ. 生徒支援 生徒の自己実現を促す進路指導</p> <p>1. 生徒の自己実現を促す進路指導 (1) 進路選択への指導・助言 (2) 基本的学習習慣の確立(0Jダイアリー・ビッグシスター制度など) (3) 英語外部検定試験への対応 (4) 新しい大学入試への対応 (5) 併設大学・短大の特色を活かした進学指導 (6) 協定校推薦枠の拡大</p> <p>2. 心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援 保健室・教育相談室・サトルム及び病院・関連機関との連携。教員の支援スキルの向上。スマホ依存・トラブルへのサポート</p>
<p>Ⅴ. ICT教育の推進 ICT 技術を、今後の探究型、横断型授業に活かしていくことができるように研究する。(2018年度に中学南校舎、高校北・東校舎に Wi-fi 設置を行った。)</p>	<p>Ⅵ. 教務の新(入力)システムの導入準備 独自システムではなく、多くの学校が採用している入力システムを本格的に研究する</p>
<p>Ⅶ. 危機管理 大地震を想定した危険回避訓練を教職員で検討する。また食料・水等の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対策について検討する。</p> <p>地域の避難所としての対策を検討する。重要情報・個人情報の漏洩防止への対策を行う。</p> <p>(2018年度は6月に大阪北部地震、9月に台風21号による被害を経験した。)</p>	<p>Ⅷ. 施設・設備の保全と充実 南校舎外壁補修継続、チャペルの空調及び校舎の空調設備の整備等、優先順位を決めて工事の計画を進める。(2017年度に南校舎外壁補修工事は終了)</p>
<p>Ⅸ. 教員の労務環境改善 1週1日の研修日の維持改善に努め、より働きやすい職場にしていくよう努力する。育児短時間勤務を3歳から小学3年生までと改訂。介護休暇についても検討を進める。</p>	<p>X. 経費削減と効率化 中高大短、法人の事務の一元化を適宜進める。諸経費の見直し、管理部門の経費削減と効率化を図る。補助金制度を有効活用する。</p>

【自己評価アンケートの結果と分析】2020.3.31

自己評価アンケートの結果と分析	自己評価アンケートの結果と分析	自己評価アンケートの結果と分析
○生徒 [2019年12月実施]	○保護者 [2019年12月実施]	○教職員 [2020年2月実施]
<p>宗教教育・解放(人権)教育について</p> <p>宗教教育について、肯定的な回答率は程度の差はあれ、例年一定70%以上の肯定的な意見であったが、今年度は例年のように中2での落ち込みがないどころか、全学年85%以上の肯定的な意見を得られる結果が出た。特に顕著なのが高1において前年度から10ポイントも上昇していることが挙げられる。この要因として考えられることは、本校での行事も生徒が受け身傾向になっているとの提言を受け、行事改革を推進する中で、個々が自主的に取り組めるよう、例えば講義スタイルのものから発話スタイルのものへなど、各宗教行事において教員が工夫を凝らしてきたことがあるのではないかと、また、生徒個々が振り返りをする方法にも改善を加えてきたからなのではないかと推測している。</p> <p>解放(人権)教育についても、宗教教育と同じく全学年が87%以上の肯定的意見を挙げており、特徴的な学年で言えば、中3の94%の肯定的意見である。これは、沖縄修学旅行を中心とした平和学習の取り組みの充実が要因と考えられるが、「他者承認」の意識の高さも92%と高い成果がみられた。また高3においては、中1段階から6年かけて30ポイントも上昇が見られ、教育とはに答えを出すものではなく忍耐を持って涵養し長い時間を要するものだと教えられる。これからの教育課題は「対話的な深い学び」とされているが、このことこそ学校で学ぶべき中心課題となる。世の中がいかなる状況となろうとも本校の教育方針を持って、これからの社会に関わる人を育てていきたい。</p> <p>宗教、解放のプログラムでの学びは、学年が上がるにつれて、これまでの基本的な人権、平和についての学びを継続しつつ現代社会の課題である様々な国の人々との共生、(発展途上国への支援)日本の中にある貧困、子どもの権利、非正規雇用、ジェンダーギャップ、トランスジェンダーなど、目の前の事象を見つめて、自身の進路や生き方と直結するものとなっている。高3までの3年もしくは6年間で、どの学年も各々の個性や人格を尊重し合い、解放プログラムで取り上げる社会的なテーマに関心、理解を深めることに繋がっている。加えて、宗教教育プログラムで聖書の言葉に触れて自己の内面を洞察し、他者との関わりについて考えを深めていく。</p> <p>徐々にではあるが確実に、自己肯定の心を持ち、自分自身の言葉で考え、自分自身が社会に良い変化をもたらす主体として自覚し、他者を受容し、助け合うために学ぶという意識を育てていきたい。また一人一人が、より多様化する集団の構成員である以上、引き続き、校内で差別事象に気づき、そのことに立ち向かうことのできる鋭い人権感覚を研ぐべく、教職員、生徒共々取り組みを続けていきたい。</p>	<p>保護者アンケート回収率は、中学68%、高校60%</p> <p>昨年度よりも中高共に回収率アップ率が下がってしまった。お忙しい中、お手数をおかけすること、そのご協力に感謝するが、アンケート方法にも工夫を考えねばならない。</p> <p>課題の多い項目については、保護者のご支援に感謝しつつ一歩ずつニーズに応える努力を行ってきたい。</p> <p>本校に入学したことについて、今年度も、全学年の93%の保護者が肯定的回答をくださった。</p> <p>学校の教育方針も89%以上の保護者に理解されているという昨年度と変わらぬ高い結果となり感謝であった。</p> <p>このことは、本校のPTA(本校ではへール会と呼ぶ)役員の方々の活動に大いに助けられ、支えられていることに感謝を申し上げたい。本校のキリスト教教育が、生徒の日々の学校生活や行事、PTA(へール会)活動を通して保護者によく理解されていることは本校の教育の大きな強みである。キリスト教教育を土台とした本校の教育方針が、生徒の人格形成、生涯にわたる学びの礎となっていることが認知されているということは、生徒を教育する上で最も重要な点であり、教職員と保護者が一致して、生徒の人格教育にあたっているということを確認した。これが本校の教育の最も大きな特徴である。</p> <p>ニーズにあった教育活動、また教職員の熱意については、昨年度と同じ80%以上の肯定的な回答を得た。</p> <p>学校行事、生徒会活動、クラブ活動については、肯定的な回答が90%を超え平均は93%であるなど、満足度は高く持っていたに違いはない。クラブ・行事の学習との両立は常に課題としてあるが、全人格的な成長のために、これらの活動が果たす役割はとも大きく、生徒が主体となって、互いが協力して目標を達成していく活動をこれからも大切にしていきたい。これらは、一貫教育の中で、学習や将来の進路選択、夢の実現へのモチベーションアップに確実に繋がっている。教職員の熱意の点においても平均85%の回答を得ているが、中には「先生によって差があるのではないか」といったご意見もあり、真摯に受け止めた。</p> <p>教育環境、施設設備の整備についても平均93%の保護者から肯定的回答をいただいた。</p> <p>庭の草花や木々は、創立から136年大切にしてきた重要な教育環境であるが、2018年度から始めた高校北・東校舎の外壁補修が2019年度の春先までかなりご迷惑をおかけした。また貯水タンクの取り換え、空調設備の更新など、今後も工事を予定しているため、適宜適切な工事計画を行ってきたい。また、できるだけ早い時期にチャペルのWi-fi環境を整え、(各校舎は既にWi-fi環境完備)ICTを利用した教育活動を推進していきたい。また、従来の教育スタイルを進展させ、協働活動に相応しい教室環境を整備していくなど、将来の教育構想に基づく施設設備の充実について検討を進めたい。</p> <p>特に、新型コロナウイルス感染症対策で3月から臨時休校措置を行ったが、現在のICT学習環境を利用して、生徒の家庭学習を保障する方法を考えた際に、今後の課題が明らかになった。今後はこれらの課題に具体的に取り組み、非常時を含めて、様々な場面で活用できるツールとして、ICTの有効利用を進めていきたい。</p> <p>また、大地震に備えてのマニュアル、備蓄や必需品の整備も少しずつ進めている。</p>	<p>教職員への自己評価アンケートは、下記の表「3. 本年度の取り組み内容および自己評価」における「評価指標」に基づいて行った。前年度との比較を行う主旨から、中期計画の項目と関連させたアンケート項目を立てた。</p> <p>分析は肯定的回答のパーセンテージを確認しながら進めたが、教員の回答は、例年と同様にどの項目についても、「思う」よりも「やや思う」のパーセンテージが高い傾向にあった。しかし2019年度の振り返りにおいては、その回答が全体的に肯定的なパーセンテージが上昇していることが嬉しい。掲げている課題を100%まで持っていき道は険しいが、教職員が現状に満足せず、まだまだ高いところを目指している途上であることに希望がある。</p> <p>I. 建学の精神と教育理念の実践</p> <p>キリスト教に基づく人間理解の深化/建学の精神の再認識と再構築</p> <p>キリスト教教育による人格形成、生涯学習の土台の形成について、肯定的な回答は98%で、昨年度より10ポイントも上回った。やはり本校教育の核となる部分はここにおいてはいいことを全教職員が理解していることは大事なことである。そして教職員側からの一方的な押し付けではなく、生徒たちがこの理念を自分の成長に必要であると思うことで完成する。そのための取り組みをさらに進めていきたい。</p> <p>II. 教育の内容と学習支援の充実</p> <p>学力向上 中高6年間を見通して、基礎学力を定着させることに加えて改革される大学入試に対応することや新学習指導要領対応のカリキュラムを創るべく各教科で改訂作業を継続している。何より観点別評価の策定、全体評価における形成的評価の割合を大きくしていくことの重要性に確信を持った1年であったと言える。その上で各々の授業計画、指導目標を立て、授業を行ってきた成果はあったのではないかと。「目標を明確にできたと思う」と肯定的回答を寄せた教員は85%であり、昨年度より7ポイント上昇した。時代の変化が激しく、教職員の世代交代が行われる中、また今年度は国際バカロレア(以後IBと略す)コースの生徒のDPの1年目であり、本格的な指導体制がスタートする中、IBカリキュラムから学ぶことも多かった。そんな現状の中で目の前の生徒と向き合い、根気強く指導の質を維持しようと奮闘している教職員の姿が見えてくる数字である。(中学生の授業アンケートに見られるA「教員の授業内容への年間計画」、B「授業のわかりやすさ」がさらに数ポイントアップしていることにも表われている)、さらに教員間で研究や相談し合いながら発展させていきたい。</p> <p>一方で、「1年間で生徒の学力(学力推移調査、「スタディーサポート」等を参考に)は上昇したと思うか」との問いについては、今年度は49%と昨年度よりも6ポイント上昇したがまだまだ低い。この基礎学力定着についての方策も喫緊の課題と捉えて対策を審議している。</p> <p>自己管理 数年前から、学力向上を目指すため、スケジュール等の自己管理能力養成は必須であると考え、中学生からこの課題に力を入れて取り組んできた。一昨年度より中1、2生は「論理エンジン」学習を、昨年から中3が総合学習を探究型のレポート作成の内容に切り替えた。6年目となるOJダイアリーへの取り組みも継続している。中学生には授業ごと、朝終礼の時間にダイアリーを記入することを習慣づけているが、長期のスケジュール管理、振り返りを意識づけるためには、総合やホームルームなどのまとまった時間を充てることも効果的であると考えている。「自己管理能力の向上」についての教員アンケートの結果は74%の肯定であり、やや上昇したが。今後は主体性、積極性、自己管理能力はますます重視される時代となる。情報の溢れる中、自分に必要な情報を選ぶこと、スケジュールを立て自分の生活を管理していくことは課題解決型、探求型学習への第一歩である。SNSから大量に配信される情報を有効に活用して時間とエネルギーを自身の向上に活かすためには、授業・評価のあり方そのものの転換が必要であり、それこそが今行われている教育改革の中心となるだろう。</p> <p>授業・補習内容の充実 高校生の希望者補習(水曜・土曜講座)、自習用講座(88講座)の成果については昨年度がかなり下降したので数字は戻った感じだ。これは内容を刷新するなどの対策を行った結果だがまだまだ不十分である。</p> <p>分割授業、習熟度別授業については、肯定的な回答は昨年度並み。ビッグシスターによる放課後学習プログラムに加え、基礎学力定着学習プログラムについては、27%も下降であった。よって、学力定着に向けて補習制度のみならず、授業は勿論のこと、行事改革なども視野に入れて改善のために検討を重ねている。</p> <p>新しい学力観・大学入試改革への対応 上記課題について、「教科、学年での話し合い、準備の進捗状況」については、62%の教員からの肯定的回答を得、昨年度より26ポイントも上昇となった。「英語の外部検定受験への働きかけ」についても昨年度よりさらに10ポイントアップの肯定的回答となった。進路委員会を中心に様々な対策を行っているが、生徒達の学習意欲向上のためにはまだまだ多くの課題があるのが現状である。「国際特別入試制度及びその制度による入学生の課外授業の成果についての肯定的回答は66%と伸び悩んでいる。2019年度入試では落ち込んだ受験者数も2020年度には再び上昇した。この入試へのニーズと本校の国際理解教育への期待、評価の表れであると受け止めている。国際バカロレアのカリキュラム・評価方法を学びつつ、本校の教育を見直ししていくことが、今後の大阪女学院の教育改革の核となる取り組みである。国際バカロレア教育導入への教職員の理解についての70%の肯定的意見を80%に上げていきたい。</p> <p>協定校推薦制度の進路保障の意義についても昨年度より10ポイント上昇。この推薦制度は現在の本校の募集にとっての生命線ともいえるが、今後は今まで以上に多様な進路選択が可能になるよう柔軟かつ幅広い進路指導を推進していきたい。</p> <p>理系2コース(2類・1類)の導入 内部生、高校入学生ともに理系への関心が高いことから、2類難関理系大学志望、1類幅広い理系大学志望として2コース制を導入して4年目となった。このことが、生徒たちの進路選択の幅を拓き、希望する学習環境の提供に役立ったかという問いに対して、肯定的解答が53%(昨年度27%)であったことは、このコースの生徒の希望については理解を得られている証拠だろう。ただ、やはり理系1類の生徒のモチベーションを向上させることに苦勞している現状がある。1類の生徒達が、当初の理系進路への目標を持ち続け、しっかりと学習に取り組めるような仕掛け、対策を行うことが急務である。</p>
<p>生活指導について</p> <p>生徒達は、本校の生活指導の中心になっている「本当の自由」への理解～人に言われるのではなく、自分で考えて時々に応じた言動をとる～という目標については、その考え方を理解している。誇りを持って目指していく姿勢は中1から持っており、しかし学年が上がるごとに実行の難しさに直面し、その重要性を更に深く理解して行くことになる。今年度においては中1も84%と高く、全体で84%以上の肯定的意見であった。</p> <p>具体的な「社会のルールや公共のマナーが身についているか」「基本的な生活習慣(遅刻、片付け、身だしなみなど)は身につけているか」という質問についても例年同様80%~95%台となった。しかしこれら生徒たちの評価は、大人の目から見た評価よりも甘めであるように思う。中高ともに自分の言動の不十分な点には気づいていないところが多いように思われる。よって具体的な指導を事あるごとに丁寧にやる必要がある。保護者との連携を行い家庭の協力を得て進めていきたい。</p> <p>挨拶の取り組みは、中1から中2で下降する傾向にあるが、今年度の中2に限ってはほぼ横ばいであった。思春期独特の心理も関係するかもと思うが、気持ちはあっても声に出して表現することが苦手の生徒が多い。高校生になると実行できる生徒が増えていくが、全体として75~82%である。社会での大切なコミュニケーションの第一歩として、取り組みを続けたい。</p> <p>「自己管理能力が身についたか」については、高校において上昇している・特に高校2年生においては12%も上昇するなど、「Classi」を用いた自己管理習慣づけ指導が功を奏しているのだろうか。今後も生活指導のみならず日常学習定着の重要な項目として、この自己管理能力の獲得が上げられる。OJダイアリーや試験2週間前学習計画表の提出など、具体的な取り組みを続けながら推進したい。</p> <p>大学入試改革等に伴い、スマホやタブレット、パソコンの学びの場への導入を必要に応じて進めている。eポートフォリオの作成や、課題探求型の学びに取り組む必要から、また授業以外の自学自習や放課後学習のツールとして、SNS利用についてのリテラシー、著作権の保護等、アカデミックオネステシーについての学習プログラムの構築が必要である。一方、一部の生徒についてはスマホ依存の傾向が顕著になっているため、その指導が大きな課題である。加えて、この度の新型コロナウイルス感染症に伴う休校措置において、学習課題や授業内容の配信のための教育のツールとして、ICT機器の利用が極めて有効であることを痛感させられたので、このシステム構築を積極的に推進したい。</p>	<p>家庭への連絡、情報提供については、肯定的回答は平均すると79%と年々下降気味であったことから反転して2ポイントの上昇を得たことは嬉しい。</p> <p>本校での保護者への連絡ツールの主なものは生徒に持ち帰らせるプリント類である。行事や、クラブ等についての情報提供としては、学年、学級通信、H.P.のクローズドサイト等がある。緊急時はNTTコミュニケーションズのFairCastを利用してはいた。</p> <p>思春期の子どもたちの学校生活に対して、保護者としては心配が多く、学校からの細やかな情報提供を求めているということがあるが、教職員・保護者が生徒の自律・自立を阻害しないように、見守りを続けるためにも、学校と保護者間の信頼と連携が重要である。このポイントがさらに高く得られるように日々、丁寧な保護者対応に努めたい。</p>	<p>生徒の生活全般に対する指導 SNSの利用については、「生徒への適切な指導について」肯定的回答は57%(21ポイント上昇)。「保護者の理解と協力を得られたかについて」肯定的回答は70%(30ポイント上昇)となった。保護者の危機感も年々強くなり、学校としても保護者向け講演会を持ち、保護者との連携を目指しているが、個人情報や画像の無断アップ、ネット上でのやり取りからの人間関係のこじれ、依存による学習、健康への影響、ネット友とのトラブルや被害などは後を絶たない。指導を受ける生徒の延べ数は少しずつ減る傾向にあるものの、その依存度が大きな生徒がいることも否めない。小学生時代からリテラシーや自己管理の力もないままスマートホン使用をしていることの問題を感じる。</p> <p>服装、身だしなみ、挨拶、公共のマナーの指導について、どれも肯定的回答はいずれも上昇であったが、生活指導委員会を中心にした日々の取り組みによる成果である。</p>
<p>学校行事について</p> <p>学校行事については、今年度も、生徒会主催の行事、学年ごとの行事、6学年共に80~90%以上の生徒が、「生徒同士のつながりを深めるために有意義である」と答えている。しかし、今年度は中1と高3以外の4学年において昨年度よりも下降が見られる。このことはどういった原因が挙げられるのかははっきりとは判明しない、昨年度も1学年の下降状況を分析した際に、友人との関係構築に難しさを覚える生徒が多いのかもしれないと書いたが、いよいよ対話的な行事活動を行うことにより、本来の意味での協働学習力を身に付けていく必要がある。生徒会役員・生徒会委員及び何かしらのリーダー的役割を担う生徒たちは主体的に行事をよく運営している。</p>	<p>へール会(PTA)活動について、例年通り保護者の平均91%から肯定的回答を得た。</p> <p>本校はPTAを創立者の名前をとってへール会と呼んでいる。先述のとおり、へール会の役員(本部委員・学年委員・学級委員)は、担任をはじめ教職員と協力して、互いの親睦をはかりつつ、学校の多くの活動に協力してくださり、教育活動へ大きな貢献をしてくださっている。</p> <p>また、生徒数の減少、物価の高騰、消費税率のアップ等で、へール会会計逼迫の折から、経費削減のため2018度からへール会の行事改革・財政改革を手掛けてくださった。(生徒の教育活動への支援には影響がないように配慮いただいた)おかげで、今年度以降も、健全な運営の見通しが立っていることは感謝である。</p> <p>中高6学年の保護者有志と教職員約200名が集うクリスマス会、私学助成のための署名活動は保護者全員にご協力をいただいている。また、発足して8年になるお父様の会ウキルミナ・メンズクラブ(WMC)の活動からも学校教育への+</p>	<p>生徒の生活全般に対する指導 SNSの利用については、「生徒への適切な指導について」肯定的回答は57%(21ポイント上昇)。「保護者の理解と協力を得られたかについて」肯定的回答は70%(30ポイント上昇)となった。保護者の危機感も年々強くなり、学校としても保護者向け講演会を持ち、保護者との連携を目指しているが、個人情報や画像の無断アップ、ネット上でのやり取りからの人間関係のこじれ、依存による学習、健康への影響、ネット友とのトラブルや被害などは後を絶たない。指導を受ける生徒の延べ数は少しずつ減る傾向にあるものの、その依存度が大きな生徒がいることも否めない。小学生時代からリテラシーや自己管理の力もないままスマートホン使用をしていることの問題を感じる。</p> <p>服装、身だしなみ、挨拶、公共のマナーの指導について、どれも肯定的回答はいずれも上昇であったが、生活指導委員会を中心にした日々の取り組みによる成果である。</p>
<p>学校生活について</p> <p>「楽しく充実している」については、「クラブ活動が活発である」という項目について、80%前後の肯定的回答が得られるものの多くの学年で2年続けてさらにポイントが下降している。昨年度の下降理由として、生徒からの相談に対する教員の対応への評価が低いことが原因であると考えたが、今年度のこの項目(先生は悩み相談に乗ってくれる)の評価は、昨年度よりポイントがアップしていることから、別の原因が考えられる。先の行事の項目でも書いた通り、生徒の自主的活動の時間管理能力の不足ではないかということである。今年度「相談に乗ってくれる」がアップしている、「充実した学校生活のために指導してくれる」が、特に中学生で下がっていることから、生徒たちの中には、話を聞いてもらうだけではなく、教師に何らかの解決策を示してほしいといった依存、受け身の傾向が強くなっているかと推測するからである。行事、クラブともに学校からの指導、仕掛けの方法を変えていかねばならないと考える。</p>	<p>へール会(PTA)活動について、例年通り保護者の平均91%から肯定的回答を得た。</p> <p>本校はPTAを創立者の名前をとってへール会と呼んでいる。先述のとおり、へール会の役員(本部委員・学年委員・学級委員)は、担任をはじめ教職員と協力して、互いの親睦をはかりつつ、学校の多くの活動に協力してくださり、教育活動へ大きな貢献をしてくださっている。</p> <p>また、生徒数の減少、物価の高騰、消費税率のアップ等で、へール会会計逼迫の折から、経費削減のため2018度からへール会の行事改革・財政改革を手掛けてくださった。(生徒の教育活動への支援には影響がないように配慮いただいた)おかげで、今年度以降も、健全な運営の見通しが立っていることは感謝である。</p> <p>中高6学年の保護者有志と教職員約200名が集うクリスマス会、私学助成のための署名活動は保護者全員にご協力をいただいている。また、発足して8年になるお父様の会ウキルミナ・メンズクラブ(WMC)の活動からも学校教育への+</p>	<p>生徒の生活全般に対する指導 SNSの利用については、「生徒への適切な指導について」肯定的回答は57%(21ポイント上昇)。「保護者の理解と協力を得られたかについて」肯定的回答は70%(30ポイント上昇)となった。保護者の危機感も年々強くなり、学校としても保護者向け講演会を持ち、保護者との連携を目指しているが、個人情報や画像の無断アップ、ネット上でのやり取りからの人間関係のこじれ、依存による学習、健康への影響、ネット友とのトラブルや被害などは後を絶たない。指導を受ける生徒の延べ数は少しずつ減る傾向にあるものの、その依存度が大きな生徒がいることも否めない。小学生時代からリテラシーや自己管理の力もないままスマートホン使用をしていることの問題を感じる。</p> <p>服装、身だしなみ、挨拶、公共のマナーの指導について、どれも肯定的回答はいずれも上昇であったが、生活指導委員会を中心にした日々の取り組みによる成果である。</p>

<p>進路指導について</p> <p>例年、中2から中3にかけて、どの学年も高校のコース選択をきっかけに、進路についてよく考えるようになっていく。今年度においても中2、3生共に非常によく考えていて特に中3については94%と高い数値で良く考えるようになっている。あと、高1で少しカーブが緩み、また、高2になって真剣に考えるようになる傾向があるのだが、今年度も高3について高2で一旦下降する理由は、このアンケートが12月に行われるので、すでにコース選択を考える時期を過ぎていることがあげられる。現に「卒業後の進路に向けて考えたと思うか」の項目は、どの学年もほぼ同じ傾斜の右肩上がりであり、高3についても90%近くが前向きに考えていることがわかる。このことは、進路指導部が様々な新しい取り組みを行っている成果と言えよう。将来進みたい方向については中3で少しずつ意識が高まり、昨今の多様な大学入試のあり方などについて、生徒たちが大きな関心をもっている様子がうかがえる。</p> <p>国際教育について</p> <p>毎年、留学生との交流については、アンケートを実施した高校全学年で80%前後の高い肯定的回答を得ているのだが、今年度の高2は昨年度よりも5ポイントも下降した。今年度高2に所属した年間留学生との交流はとて実りあるものと見受けられただけに、残念な結果である。留学生との交流が、一部の生徒との交流にとどまっているのかもしれない。どうすれば学年全体、学校全体に波及していくのかを考えていきたい。短期、中期で訪れる留学生とも仲良くなる生徒たちを見ていると、先述のコミュニケーション力の向上に役立つことと、このような交流が何よりの互いの文化の理解と平和の基礎であると思わされるので、この取り組みはさらに大切に推進していきたい。</p> <p>授業評価について</p> <p>どの項目についても、例年は、肯定的な回答は高校生が高く、中学生では若干低い値との傾向があるのだが、今年度の特徴は、中高共肯定的な意見が若干高くなっている。そして、昨年度に挙げていた、D「教科内容の興味、関心を持てる」項目が毎年下がってきていることについて、今年度は他の項目よりも全てにおいて高くなっていることが喜ばしい。これは教員たちが魅力ある授業を行えるよう工夫するなど、生徒が能動的に学習できるような授業形態、授業外学習への促しを行ってきたからと言えるのか、次年度もこの評価が得られるよう邁進していきたい。そのためにもIB(国際バカロレア)的教育方法を活用して、ATL (approaches-to-teaching-learning) をより良く取り入れていきたい。</p> <p>各教員の授業評価は、同じ教科、同じ学年を何クラスか担当している教員の評価が、クラスによってかなり差があることから、教員と生徒の関係づくりが、授業成果に直結していること、また教員の声かけ、発問一つでその教科への生徒の興味や意欲が喚起されることが確認できる。そして、今年度は、全体として、良い評価を得ていると思う。また、このアンケート結果は全教員へ個別に知らせているが、それを受けて教員自身が自己点検(評価)を行う形を構築していきたい。</p>	<p>二分なサポートをいただいている。何より本部役員の方々には、日常の教職員へのサポートのみならず、広報活動として校外で行う学校説明会(evening説明会)に出席していただき、保護者の立場から学校の紹介をしていただく形でご協力をいただいている。心から感謝申し上げたい。</p> <p>また、文科省からの指導に従い、本校でも「クラブ活動に関するガイドライン」を2018年度末に策定した。生徒の発達段階に応じたクラブ運営となるよう心がけていきたい。</p> <p>留学への取り組みの充実 留学については、留学生の受け入れ、本校から送り出す留学生の学びの成果ともに充実しており、留学を希望する生徒へのサポート体制も整っているという教職員の認識(肯定的解答89~96%)である。留学・海外進学サポートの項目が昨年度は低かったが、2019年度から専門の担当者を配置したところ教員、生徒、保護者から非常に高い評価を得た。めまぐるしく変化する国際情勢、ニーズの多様化、大学入試改革の動向の中で、この分野は卒業後の進路にも直結していくことから、情報収集と研究の継続が必要である。</p> <p>人権意識を深める取り組み/心身の健康と安全を守る指導</p> <p>学校、学年の人権プログラムの充実についても、支援教育(長期欠席、不登校傾向等の生徒への指導)・いじめの未然防止について、教職員のサポートについても肯定的ポイントは上昇した。人間関係については教職員研修でワークショップを取り入れるなど、出来る限りの努力はしているが、互いの意見を交わし合いながら、諸々のことを進めるゆとりを持っていない教職員のジレンマが伝わってくる。厳しい教育現場ではあるが、助け合い、生徒をサポートのために弛まず向き合っていきたい。</p> <p>III教育の実施体制の改善</p> <p>募集・広報活動 「本校の特色を活かした取り組みを提案、アピールできているか」「本校の広報活動、募集対策は適切か」「募集・広報に積極的に関わることができたか」の各項目について、肯定的回答率は昨年度よりも上昇し70%~80%と持ち直した。教職員の募集への意識は高まり広報活動への協力も得られた。今後も極力、日常業務に圧迫を与えないよう努めたい。時代の厳しさは増しこそすれ緩むことはないが、本校らしい教育を進めていくために互いに意見を交わし合い、課題を共有し、本校の魅力を受験生に伝えていくことで一致していきたい。</p> <p>図書館活動 約17万冊の蔵書を誇る本校図書館は、中高大短が利用する充実した図書館である。専門知識を持つ司書(専任を含め6名)が、手厚く利用のサポートを行い、生徒の豊かな学びに貢献している。教職員の図書館の活用については昨年度よりも15ポイント上昇したが、今後も更に活用を推進していきたい。またシステムやサービスの問題よりも教職員が多忙で、図書館を利用するゆとりがない現実も推察される。IBコース教育が図書館利用についても牽引役となることを目指し、また、昨年度末に1階を「ラーニングコモンズ」とする場としてリノベーションを行ったことで、アクティブラーニング授業の活用していきたい。</p> <p>教職員の研修プログラム 2018年度から本校新任教員対象研修「チーム0J」の代わりに、キリスト教学校教育同盟の中堅者研修、カウンセリング研究会のプログラムへの参加を義務づけることにした。忙しい中ではあったが、参加した教員からは「役に立った」との意見をもらった。アンケートでの肯定的意見も上昇しており、多忙を極める中ではあるが、自身の視野を広げ、働き方を見直す上でも、これらの研修会に参加することが必要であると強く感じる。学内の取り組み、また本校を会場にしたキリスト教学校教育同盟のプログラムへの参加等を今後更に呼びかけ、教員の学ぶ機会を保障するように考えていきたい。</p> <p>IV生徒支援</p> <p>進路指導の取り組み 中学1から高校3年まで各学年での進路プログラムは生徒のモチベーションアップに大いに役立っている(肯定的解答89%(昨年から16ポイント上昇)、高校3年生の大学入試直前のプログラムについても肯定的解答74%(昨年から18ポイント上昇)であった。大阪女学院大学、短大との連携については64%(昨年度よりさらに13ポイント上昇)が進んでいると評価が高まった。大学短大のユニークで優れたカリキュラムに魅力を感じて、進学先の候補に入れる生徒も増えており、入試情報の共有等、連携が進んでいることは望ましいことである。</p> <p>V. ICTを利用した授業等への取り組みの推進</p> <p>中高の校舎にはwi-fi環境の整備が完了した。昨年度高1よりeポートフォリオを記すことが必須となり、学年分の“Chromebook”を設置し、“Classi”を利用してその指導にあたった。IBコース生徒は入学時より“Chromebook”を各自購入。また昨年度始まった中3の探究型学習でもH.R教室で学校設置の“Chromebook”を利用して各自がレポートに取り組み研究が深まった。中3では放課後の“スタディサプリ”を利用した自主学習にも“Chromebook”が使用され、学力定着に一役を担っている。専任教職員全員に昨年度から“Chromebook”を貸与し、一部の会議で利用を始めた。世の中は急ピッチで生徒1人に1台を持たせての学校生活・授業に向かって動いている。「ICT利用の計画は進んでいるか」の問に対し、66%の肯定的解答を得た。(昨年時47%)。セキュリティを含め環境整備が急がれる。2018年度末にICT教育推進のためのガイドラインを策定し、2020年度からは、システムアドミニストレーターを担う人員配置を行うなど推進に努める。</p> <p>VI. 教務の新(入力)システムの導入準備</p> <p>2019年度中に新システム導入を終了。今後は新学習指導要領に向けてのソフト改良作業に入る。</p> <p>VII. 危機管理</p> <p>生徒・保護者・教職員からのハラスメント(体罰を含む)についてのアンケートを継続実施している。ハラスメント防止のための取り組みについての肯定的解答51%(2ポイント上昇)、ハラスメント委員会の機能についての肯定的解答は64%(15ポイント上昇)である。ハラスメント委員(教職員の互選)は、アンケートで上がった事象について丁寧に対応しているが、教職員の認識が時代に追いついていないこと、個人差があること等から相談委員の立場の難しさが指摘されている。生徒と教職員自身の心身の健康、命を守るための重要な取り組みとして明確に位置づけ、互いに協力してこの課題に当たっていききたい。2018年度から学院全体で教職員の意識向上のため、防止委員会が提案する研修を実施しているが、これを現場に活かせるものにしていきたい。</p> <p>「地震をはじめ防災への取り組みについて」は少しずつ進めているが、避難時の備蓄、地域との連携等まだ多くの課題があり、計画途上である。そのためか回答での肯定的な回答は昨年よりアップしてはいるが81%であった。自然災害のみならず、今回のコロナウィルス感染症などの危機への対応についても、事後に検証し、対策を考えていきたい。</p> <p>VIII. 施設・設備の保全と充実</p> <p>さまざまな施設設備の改修が必要となっている現状から、昨年からのアンケートにこの項目を追加した。肯定的回答は昨年度より上昇して74%であった。経済的な裏付けが必要なことでもあり、なかなか十分と言うわけにはいかないが、教職員の意見を聞き、理解を得て進めていきたい。</p> <p>IX. 教員の労務環境改善</p> <p>「週1日の研修日等労務環境の改善」については、肯定的回答は57%(昨年64%)と下降。研修日を保障することの重要性和同時に、研修日メンバーの不在を出席メンバーで補い、引き継ぎや共有を行うことの難しさが教員のジレンマであり、この下降の原因であると考えている。労務環境についてさらに改善を目指したい。</p> <p>また、生徒の教育活動にも関わることだが、文科省からの指導に従い本校でも「クラブ活動に関するガイドライン」を2018年度末に策定し、2020年度からは定時の校舎閉館を始める。これにより教員の労働過剰緩和につなげていきたい。</p>
---	--

3. 本年度の取り組み内容および自己評価

	重点目標	具体的な取り組み計画・内容	評価指標 *通し番号は教職員アンケートの番号 中期計画の項目順と異なっているため、一部順番に入れ替わりがあります	評価目標 に対する 自己評価 達成率	自己評価
I. 建学の精神と教育理念の実践	1. キリスト教に基づく人間理解の深化 2. 建学の精神の再認識と再構築	時代の求めに応じた宗教教育の推進 ・日々の礼拝、宗教行事(修養会、伝道週間等)、宗教部付クラブ活動、有志による施設訪問、その他のボランティア活動の継続。 ・被災者支援の会による東北ボランティアキャラバン(2015年度からは年1回夏)、文化祭時等東北支援物販、追悼礼拝(3月)の継続 ・日本国際飢餓対策機構、ワールドビジョンの行っている里子支援への協力 ・学生YWCAを中心とした釜が崎での「炊き出し」への参加	1. 礼拝、宗教行事等、キリスト教教育全般を通して「愛と奉仕」の精神をもって、互いの個性を尊重し合い、自分自身の生き方を考えるよう導いているか。	99%	本校の精神の土台であるキリスト教教育については、136年の伝統の中で生徒、保護者の理解と協力を得、「生き抜く力」「愛と奉仕の精神」を養うという人格教育として成果を上げている。 自分に与えられた力を、自分のみではなく他者に用いるために学ぶ意識が生徒に育っている。 女子校という環境を最大限に活かした教育が実践出来ている。 教職員の世代交代の中で、キリスト教教育の理念が時代の求めに応じた形で再認識、再構築されるよう継承していくことが重要であり、今年度は教職員個々の意識でそれが達成できたということは評価できる。
II. 教育の内容と学習支援の充実	1. 学力向上の取り組み -新しい学力観への対応-	(1) 自学自習・自己管理能力の向上 ・0Jダイアリー、学習計画書の活用による自己管理能力を身につける指導を継続する。 ・中学校校舎内に English activity スペースを設置 ・高校校舎の質問コーナーの拡充の検討。 ・中高授業での分割授業中学でのビッグシスター制度や学力定着学習支援によるボトムアップに加え、高校での実力錬成補習、(水)(土)講座、大学入試準備プログラムを継続発展させる。 *ビッグシスター制度…推薦入試で進学先の大学が決まった高校3年生が中学1、2年生の学習を補助する制度。 ・中1・2学力定着学習支援(数学・英語各週2回)の充実。 *各学年支援の必要な生徒10名を教員2名で、放課後宿題等課題の学習を50分行う制度。 ・水曜講座(高校3年文系有志補習)、土曜講座(高1・2有志補習)、BB講座を継続、充実させる。 ・BB講座の英検講座のみ受講する制度の拡充。“スタディサプリ”の推奨。 ・高1生は“Classi”による「ポートフォリオ管理と学習動画」を行う。 ・高2・3生は、“マナビジョン”による「ポートフォリオ管理と学習動画」を行う。 ・中高全館でのWifi設備を完備。インタラクティブな授業展開の推進。 高1IBコース生は、個人端末機を所持し、授業での活用を推進する。 (2) 論理的思考力の育成 ・論理的思考力の構築のため中学1・2年生に「論理エンジン」を導入し、中3での探究型授業(2018年度～)をスタートしていく。 (3) シラバスの検討・改善 2020年の大学入試改革を見据えて、中高一貫カリキュラムを見直し、各教科でシラバスの改訂を行う。 (4) 英語科英語教科の改革 ・4技能外部検定試験に対応するため高1・2の英語の授業にスピーキングの内容を取り入れ、GTEC-CBT、他の検定試験も積極的に奨励する。 ・2015年度S2英語科全員参加で始まったエンパワーメントプログラムの内容の継続・発展。 (5) 「国際特別入試制度」の継続と発展 中学2015年度よりスタートしたこの入試制度の入学後の学習プログラムの整備を進め、国際理解教育を推進する。 (6) 国際バカロレアの導入 2018年2月に日本語DP校としての認定を得、英語科国際バカロレアコースを開始させた。このコース授業はもちろんのこと、他の科・コースの授業研究においても、探究型学習、アクティブラーニングについて全教員が授業実践のために、国際バカロレアの学びを深めていく。	2. 中高6年間の指導目標を明確にして指導できたか。 3. 生徒の学力(“学力推移調査”、または“スタディサポート”等のデータを参考に)は全体的に見て上昇したと思うか。 4/5. 生徒の自学自習、自己管理の力は向上したと思うか。 6. 自分の授業を通じて、生徒の学びが向上する取り組みが出来たと思うか? 7. 授業で電子黒板やプロジェクターを活用できたか 8. 分割授業、習熟度別授業による成果はあったと思うか。 9. BB講座、“スタディサプリ”、土曜講座、水曜講座によって、生徒の学習が充実したものになったと思うか。 10. ビッグシスター制度による放課後の学習プログラムは成果を上げていると思うか。 11. 今後の国公立入試等の改革(探究型・合科型)に向けて、学年や教科での話し合い、準備は進められたか。 12. 大学入試の外部検定利用に向けて、生徒たちが英検、TOEIC等、外部検定を受験できるように、学校としての学年、教科、クラブ等への働きかけは十分にできているか。 13. 新学指導要領施行にあたって、観点別評価の教科内での話し合い、準備は進められたか? 14. 現在の協定校推薦制度は、生徒の進路指導、進路保障のために十分に活用されていると思うか。 15. 継続中の英語科改革(高2エンパワーメント授業、授業改革、外部検定目標達成等)について成果はあったと思うか。 16. 国際特別入試制度、及び国際特別入試による入学生の週1回の課外授業について、国際理解教育のために成果を上げていると思うか。 18. 国際バカロレアコースの導入により、国際バカロレアコースの教育方法について学習できたか。 19. 国際バカロレアコースの導入により、学院教育活動の活性化につながっていると思うか。 17. 理系2コースの導入により、中学入学生及び高校入学生の進路の選択肢を拡げ、学習の充実をはかることができていると思うか。	85% 49% 76% 91% 64% 66% 53% 60% 62% 72% 55% 83% 85% 66% 72% 70% 53%	教員は指導目標を明確にし、生徒の学力を上げるべく努力を続けて相応の成果を上げているのだが、目標意識が高いせいも例年その達成感あまり高い数値で表れていなかった。今年度は比較的高い自己評価であった。 “学力推移”や“スタディサポート”分析からの学力定着に対する教員の評価は低い。学習意欲の向上とともに、基礎学力定着は喫緊の課題である。 「自由」実現に必要な自己管理の力を育てるため、継続してスケジュール管理の指導を行っているが、学習や生活の計画を立てたり事後の振り返りをしたりするまとまった時間一斉に設けることの必要性を感じている。 「自分の授業を通じて生徒の学びが向上する取り組みが出来たか」という問いには高い自己評価を得た。個々が日々授業改善を重ねて、目の前にいる生徒達に寄り添う姿勢があった結果である。 ネット活用の学習動画ツールの導入を開始したが授業での活用はまだ十分とは言えない。これは生徒が持つ端末機導入とも関連するので、引き続き検討課題である。 英語・数学の分割授業は学力の向上に役立っているが十分ではないとの評価である。そのため、夏に進路の決定した高3に協力を得て中1・2の学習支援(ビッグシスター制度)や、学力定着学習支援制度(講師、大学生が補助員となる)を行いボトムアップの学力保障を目指したが、この取り組みも十分な成果が得られていないことから、新たな対策を検討している。 また、高校生に継続して提供してきた有志補習・講座も、一定以上の成果が得られなかったため、今年度は土曜講座に“スタディサプリ”(チューターの導入)を用いた自主学習講座を開いたところ、この取り組みは個々の生徒のレベルやペースに合わせて進められる有効な取り組みとなった。また、高3水曜講座も次年度からはさらに生徒達のニーズに合った講座を行う予定である。 これら特別講座に留まらず、日常の授業補充や自宅学習のサポートにもICTの活用を進めるべく検討していく。 探究型・合科型の主体的学習への改革には、授業や評価の方法そのものの改革が必要である。 2018年度からは中3総合での探究型授業による各自のレポート作成を始め、2020年度には新高1で「探究的な総合の時間」にSDGsをテーマとした取り組みを開始する。さらに研究を進めたい。 2018年に国際バカロレアコース(日本語ディプロマ)をスタートさせた。国際バカロレアプログラムの教員の学びが、このコースの生徒の学習のためのものに留まらず、カリキュラム作成、評価方法、体制づくりにおいて、全教科、全授業の探究型、横断型授業のモデルとなっていくよう推進したい 2018年度高1生から、大学入試改革の一つであるeポートフォリオ作成のために、“Classi”による自己の振り返りの取り組みを始めた。日々の学習、行事について振り返りを行っている生徒は、その意義をしっかりと掴み、学習をはじめ学校での活動全般に主体的に取り組む意欲につながっている。 “Classi”の学習動画については高1・2年生に“スタディサプリ”を導入し、活用を始めた。活用方法を工夫し、さらに利用を充実させていきたい。 新学指導要領施行に向けてカリキュラム変更の途上であるため、各教科での準備についての評価はまだ低い。これから観点別評価や形成的評価の視点を第一とするシラバスの構築を各教科で行う。次年度新高1から「探究的な総合学習」の内容を保健体育教科が中心となってSDGsをテーマに行うことになった。生徒達がより自主的に協働しながら学びを深めていける機会としていきたい。 英語検定などの資格対策は既に授業等で行っており、多くの生徒が積極的に取り組み成果を上げていると評価されている。引き続き資格取得率の向上を目指していきたい。 中学から4技能を鍛える英語教科の学習は充実したものであるが、2015年度より高校2年生英語科生徒を対象としたエンパワーメントプログラムを実施し、成果を上げている。 中学生に対しては国際特別入試・帰国生入試合格者、英検準2級以上合格者対象に、放課後の国際教育プログラムを続けており、ネイティブ教員の創意工夫による取り組みは一定の成果を上げている。 国際バカロレアコース設置により、授業計画や評価方法などについて教員が学び、工夫改善が進められている。この取り組みが、学校全体の活性化につながっているという70%の評価を、80%まで引き上げたい。 理系2類・1類の2コース制として4年目である。昨年度初めての卒業生の進路実績から、進路保障面ではある程度の成果が上がったと言える。ただ、クラス編成上、生徒のモチベーションや理系科

<p>2. 国際理解教育の推進</p>	<p>(7)理系2コース制の導入 理系を1類、2類の2コース制を充実したものとす。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・YFUの年間留学生受け入れ ・オーストラリア Ravenswood 校(姉妹校)との交換留学。 ・カナダ、オタワ Longfield Davidson 校(姉妹提携校)*2019年度でもって提携を発展的解消する。 ・YFU 韓国からの短期交換留学(1ヶ月) ・中期留学(高校1,2年3学期)の充実上記活動を通して国際理解教育に取り組む。 ・中学でのプレエンパワメントを2018年8月からスタートさせる。 ・夏休み海外研修プログラムの見直し。 	<p>(注)以下中期計画の項目順で記載している。</p> <p>28. 留学生の受け入れにより、充実した交流ができたと思うか。</p> <p>29. 本校から留学した生徒は、留学の成果を上げることができたと思うか。</p> <p>30. 留学を希望する本校生徒に対して、適切なサポートができていると思うか。</p>	<p>94%</p> <p>89%</p> <p>96%</p>	<p>目の力量に幅広い差があり、教員が授業展開の難しさを感じているためこの評価となっている。</p> <p>留学生の受け入れについてはYFUの年間留学生1名を受け入れ、よい交流が実現したとの高評価である。今年は姉妹校からの留学希望者がなかったことは残念である。</p> <p>本校からの留学については、高校1年生から短期・中期・長期とさまざまなプログラムが設けられており、生徒、保護者からも評価を得ている。ただこのコロナウィルス感染症関連で中期長期とも予定より早く帰国を余儀なくされた生徒があり、留学プログラムを中断せざるをえなかったことが残念である。このアンケートは12月時点の評価なので、年度末の評価はポイントが下がることか予想される。</p> <p>以前から本校では一定数の海外進学をする生徒がいたが、今後はさらに増えていくことが予想される。更なるサポートの充実を考えていく。2018年度導入のIBコースは今後、海外進学を目指す生徒にとって意義のあるプログラムとなるだろう。海外進路のために専門の担当者をおき、そのサポートを手厚くしたことにより、高い評価を得ることが出来た。</p> <p>夏期海外研修の行先を精査し、ボストンとモントレーの2カ所とした。(次年度からはボストンも終了し、新たな留学先の開拓を行う)加えてアカデミック研修として「セントメアリーズカレッジ」を導入したが最低催行人数に満たず実施を見合わせた。代替プログラムとして紹介したシアトルへのガールズプログラム(女子高生のためのツアー)に個人で参加した生徒は充実した研修を経験した。次年度はこのツアーに本校教員の引率者を立てて、アピールを強化したい。</p> <p>高校英語科で実施しているエンパワメントプログラムの中学生版として2018年度より希望制でスタートをしたプレエンパワメントプログラムであるが、今年度は希望者が少なく実施を見送った。今後はアピール方法を変えるなどして生徒の意識を高めたい。</p> <p>SNSの利用指導は、喫緊の対応を迫られている課題である。保護者自身の意識が少しずつ高まり、危機感をもって家庭での管理の必要性が理解されてきたように思う。しかし、進化していくSNS利用について、生徒自身が管理を行うことは至難の業である。実際、依存度が高く様々な問題に発展したケースもあったため、このような低い評価である。保護者と協力して、より一層生徒の指導に当たりたい。</p> <p>身だしなみ、挨拶、公共のマナーについての指導は徐々に成果を上げつつあるが、指導は不十分であるとの評価だ。今後も指導を継続する。</p> <p>解放(人権)教育のプログラムについては、キリスト教教育の「愛と奉仕」の実践と一体となって生徒の心の成長、生きる力となって実を結んでおり、高評価である。今後も時代の変化のなかで、テーマ、シラバスの見直しについて委員会での検討が必要である。今年度の特性として、新入生4月のオリエンテーション時に「コミュニケーションワークショップ」を行ったことは良い試みであった。</p> <p>本校のさまざまな行事は、宗教教育、解放教育とともに、生徒の人格形成に大きな影響を与える教育である。生徒は、行事に主体的に関わる中で、人と繋がり、自分が責任を担い、仲間とともに一つのことを達成していくことの意味を深く感じて、広い意味でのソーシャルスキルを身につけている。しかし、年々幼さを増す生徒達を育てるには、従来とは違った指導方法を見つけていく必要がある。</p> <p>キャンパスハラスメントについて、年度末のアンケートへの取り組みや委員の働きは評価されている。しかし、防止のため対策は十分とは言えず、不断の努力をしていきたい。</p>
<p>3. 生徒・教員の人権を深める取り組み/生活指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係を構築する力 ・ルールの遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる他者理解の育成 ・SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。 ・授業・学級活動・生徒会活動・クラブ活動等の活動が安全かつ充実したものになるように努める。 ・生徒の言動・表情・着衣などを注意深く観察し、虐待の懸念・精神不安のある生徒を見逃さないよう、異常の早期発見に努める。 ・通学時の安全指導に努め、警察と連携しつつ不審者の警戒をする。 ・学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。 ・自主的、かつ計画的なリーダーシップ。 ・協調性とチーム力。 ・総合的な企画力・整理力(時間、費用、あとかたづけ、ゴミ処理等)。 ・企画・計画書、活動記録の作成、教員の助言と指導。 	<p>23. SNSの利用について、生徒に必要な指導ができたと思うか。</p> <p>24. SNSの利用について、保護者に理解と協力が得られたと思うか。</p> <p>25. 服装、身だしなみの指導は適切だと思うか。</p> <p>26. あいさつについての指導は適切だと思うか。</p> <p>27. 公共のマナーについての指導は適切だと思うか。</p> <p>32. 学年、学校の人権教育のプログラムは、時代の変化に対応し、充実していると思うか。</p> <p>33. 長期欠席、不登校傾向等の要支援生徒への支援は適切であったと思うか。</p> <p>34. いじめ等の事象の発生を未然に防ぐため、意識的に取り組めたと思うか。</p> <p>35. さまざまな課題について、教員間でコミュニケーションを取り合い、助け合って取り組むことができたと思うか。</p>	<p>57%</p> <p>70%</p> <p>66%</p> <p>45%</p> <p>49%</p> <p>83%</p> <p>89%</p> <p>85%</p> <p>81%</p>	<p>23. SNSの利用について、生徒に必要な指導ができたと思うか。</p> <p>24. SNSの利用について、保護者に理解と協力が得られたと思うか。</p> <p>25. 服装、身だしなみの指導は適切だと思うか。</p> <p>26. あいさつについての指導は適切だと思うか。</p> <p>27. 公共のマナーについての指導は適切だと思うか。</p> <p>32. 学年、学校の人権教育のプログラムは、時代の変化に対応し、充実していると思うか。</p> <p>33. 長期欠席、不登校傾向等の要支援生徒への支援は適切であったと思うか。</p> <p>34. いじめ等の事象の発生を未然に防ぐため、意識的に取り組めたと思うか。</p> <p>35. さまざまな課題について、教員間でコミュニケーションを取り合い、助け合って取り組むことができたと思うか。</p>
<p>1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み</p> <p>2. 組織改善の取り組み</p> <p>3. 教員の人材育成</p> <p>4. 図書館機能の充実と教員との連携</p>	<p>(1)広報の充実。</p> <p>(2)説明会・学校訪問への全教員での取り組み。</p> <p>(3)入試対策室の充実。</p> <p>(4)中学「国際特別入試制度の継続と発展</p> <p>(1)中高6年を偏りなく経験できる人事。</p> <p>(2)世代交代を見据えた指導理念・スキルの継承。</p> <p>① 建学の精神の学び。</p> <p>② 世界の変化や課題についての学び。</p> <p>③ 支え合う組織づくり。</p> <p>④ 他校との連携。</p> <p>⑤ 新しい学力観への対応。</p> <p>⑥ 新しい授業形態(アクティブラーニング)への対応。</p> <p>(1)蔵書の充実 (2)利用教育</p> <p>(3)広報の充実 (4)図書委員会活動</p> <p>(5)その他</p>	<p>36. 変化する時代の中で、社会の課題に対して大阪女学院の特色を活かした取り組みを提案、アピールできていると思うか。</p> <p>37. 本校の広報活動、募集対策は適切だと思うか。</p> <p>38. 募集・広報に積極的に関わることができたと思うか。</p> <p>40. 解放・生活指導等教職員研修会、チーム0J(*2017年度で終了)、学院全体研修会、キリスト教学校教育同盟主催の中堅者研修、カウンセリング研究会等は、学校運営、教職員の集団づくりに役立っていると思うか。</p> <p>39. 授業、進路指導において、図書館を有効に利用できたと思うか。</p>	<p>79%</p> <p>83%</p> <p>68%</p> <p>68%</p> <p>66%</p>	<p>昨年同様に教職員全員で募集・広報にもあたることであったが、「積極的な関わり」となると70%の回答である。殊に中学校訪問は、本校の教育内容を現場の教師が紹介することを目指すとともに、教員自身が外から学校を見る機会となるため、引き続き中学校との連携を大切に続けていきたい。</p> <p>オープンキャンパス、イベント説明会、地域説明会、入試説明会、キャンパスナビと本校の魅力を教員一人一人のことで受験生に伝えることが大切である。私学の受験事情は今後も厳しい。生徒の成長を第一とし、教育内容の充実を大事にして、運営を進めていきたい。しかし、この分野にも新型コロナウイルス感染症の影響が出ていて、3月からの説明会は全て中止になり、塾訪問でさえもままならぬ状況である。Webを用いての受験生に向けての新たな発信を考えていく必要があろう。</p> <p>教職員の世代交代が続く中、建学の理念をはじめとして、指導上の財産の継承が急がれる。ふだんの業務の中だけではなく意識的に語り合う機会が必要である。多忙を極めるため研修への参加もままならない現実であるが、教科指導や生活指導のスキルの継承をしていくことの意義は大きい。教職員間で、互いの悩みや募る思いをことばで伝え合う機会は重要であるので、その体制作りにも尽力していきたい。評価として70%の肯定的な意見は、多忙な中ではあるが、工夫して教職員の学習会を行えたことの意味が大きい。</p> <p>全生徒への丁寧な利用ガイダンスが行われ、授業や課題などで、十分活用できる充実した図書館であり、司書の助言も受けられるため恵まれた環境であり、生徒は自由に利用している。ただ、授業での利用は一部に留まるという評価だ。今後の授業、レポート課題等における利用の研究は勿論のこと、読書の大事さをアピールしていくことが必要である。</p>

	<p>5. 中高大連携プログラム</p>	<p>(1)宗教・解放プログラム (2)グローバル進路 (3)大学院との合同プロジェクト</p>	<p>22. 大阪女学院短大・大学との連携は進んでいると思うか。</p>	<p>64%</p>	<p>中高の卒業生、教員の、大学短大への認識は変わり、とても身近なものになってきた。教育内容への理解が進み、評価も上昇してきている。連携は確実に進んでいるが、教職員の中にそのことが周知されていないことが数字に表れている。現状を教職員に知らせるための方策を立てたい。</p>
<p>IV. 生徒支援</p>	<p>1. 自己実現を促す進路指導</p> <p>2. 心身の健康と安全を守る生活指導と生徒支援</p>	<p>(1)進路キャリアガイダンスの充実 (2)基本的学習習慣の確立 (0Jダイアリー・ビッグスター制度) (3)英語外部検定への対応 (4)新しい大学入試への対応 (5)併設大学・短大の特色を活かした進学指導 (6)協定校推薦枠の拡大</p> <p>自ら健康の保持増進を図る能力を育成するために保健室・教育相談室（学校カウンセラー）、サポートルームが連携し生徒・保護者をバックアップする。必要に応じて医療機関や関係諸機関と連携をとり、適切な支援を目指す。</p>	<p>20. 各学年で行われる進路プログラムは、生徒の意識、意欲を高めるために役立っていると思うか。</p> <p>21. 3学期のセンター対策、私大、2次対策のプログラムは、大学入試直前のサポートとして成果を上げていると思うか。</p> <p>14. 現在の協定校推薦制度は、生徒の進路指導、進路保障のために十分に活用されていると思うか。</p> <p>41. 教職員組織はキャンパスハラスメント事象の防止に積極的に取り組んでいると思うか。</p> <p>42. キャンパスハラスメント委員会及び調査は、有効に機能していると思うか。</p>	<p>89%</p> <p>74%</p> <p>83%</p> <p>70%</p> <p>64%</p>	<p>中高での進路指導のプログラムは、生徒により影響を与えているとの高評価だ。また進路室からのさまざまな情報の発信は時代の変化に対応して、適切であると言える。</p> <p>国公立センター入試、前期、後期入試をサポートする高3の3学期のプログラムは、対象の生徒を支え、成果を上げるために定着しつつあるが、これら一般入試に挑む生徒の数は年々減ってきている。高3の秋までの推薦入試で進路を決めている生徒が半数を超えているため、その対策も充実させたい。また国公立の推薦入試に対しても1年を掛けて指導していけるような対策を行いたい。</p> <p>関西学院大・同志社女子大・神戸女学院大との協定校推薦制度は、推薦枠が広がり、魅力ある制度として生徒たちの進路保障に役立っていると評価を得ている。同時に今推薦のエントリー資格としてかなり高い英語力が求められるため、高校に入学した早い段階から英語の資格試験に挑戦する生徒が増えている。また評定の向上を目指して学力向上に努める生徒も多い。その反面、学力は高くても、行事やクラブ活動、ボランティア活動等で培われる人間力やソーシャルスキルについて十分に育っていない場合も多い。協定校に限らず、推薦入試を利用しての進学指導には、高校入学の早い段階から人間力やソーシャルスキルを培うための教育内容を充実させていく必要がある。</p> <p>支援教育委員会(2010年設置)は、教頭がコーディネーターを担い、担任、学年主任、スクールカウンセラー、養護教諭、サポートルーム指導員、生活指導部長、教務部長が構成員となり、校長のもとにチームで支援プログラムを検討する体制が機能している。担任が一人で抱え込まないで、適切なサポートができるように互いのコミュニケーションを大切にしていきたい。ただ昨今の支援を必要としている生徒への対応の方法は、今まで以上に多様化しており従来と同じような形では立ち行かなくなっている。保護者への支援こそが必要な場面も多々ある。今後はコーチング力などの学習会を開催して、教員の力を伸ばしていきたい。</p> <p>この支援機養育委員会は、いじめ防止対策委員会を兼ねている。いじめについての相談があった際に招集することになっており、教職員から選ばれたメンバーで構成されるキャンパスハラスメント相談委員の会も重要な働きを粘り強く継続しているが、一般教員には見えにくい活動であるため、意義が明らかになっていないところがあると同時に、同僚同士で忠告・助言し合うシステムの難しさがあることも確かである。</p>
<p>V. ICT教育の推進</p>	<p>ICT教育の推進</p>	<p>ICT技術を、今後の探究型、横断型授業に活かしていくことができるように研究する下記のICT教育推進のためにガイドラインの策定を行う。</p> <p>(1)中高校舎のWi-Fi環境の整備を行ったWi-Fi環境の整備計画を策定し、チャペルなど順次工事を行う。</p> <p>(2)モニター教員にタブレット型情報端末を配布した。研究を進める。</p> <p>(3)中学1年生(高校1年生)の入学時のタブレット型情報端末保持を想定し克服すべき課題等について検討する</p> <p>2018年度は、IBコース生とのみ個人端末機の保持をスタートさせた。他科・コース生については学校備品貸し出しで展開をする。</p> <p>(4)教師、生徒のタブレット管理はもとよりセキュリティについても対策を検討する。</p>	<p>7. 授業において、電子黒板、プロジェクター、MM教室等が有効に活用されていると思うか。</p> <p>31. ICTを利用した授業等への取り組み、今後の計画は進んでいると思うか。</p>	<p>64%</p> <p>66%</p>	<p>学習に関わる環境、施設整備については、重要課題として取り組みを続けている。電子黒板、MM教室については少しずつ利用が進んでいる。MM教室のPCはWindows7のサポート終了に伴い、全て10へ移行した。</p> <p>学校全体として、生徒各自にタブレットを持たせる方向での準備を進めているが、全生徒に個人端末機を持たせることはまだ行わず、中学高校のそれぞれ1学年分の端末機“Chromebook”を学校備品として設置し、必要な時に貸与している。この機種はセキュリティを第一として選んでいるので、多くの授業、行事での活用には不便なことも多く、Wi-Fi設備が十分に活用できていない現状であり、良い評価を得られていないと思われる。早く生徒達の学習に活用できるような環境を整えたい。中3では3学期に有志で、学校備品の“Chromebook”で放課後の個人学習を行い、ICT利用の新しい提案となった。また、eポートフォリオの作成のため、現高2は生徒全員に“Classi”を導入して活用している。また、次年度からは中学生も含めて「キャリアパスポート」指導を推進していくことになるので、そのためにもICT機器を有効に活用していきたい。</p>
<p>VI. 教務の新システム導入</p>	<p>教務新システムの導入準備</p>	<p>(1)成績処理等のための入力に関しては、独自のシステムではなく、新システムに移行することも視野に入れ、本格的に研究する。</p> <p>(2)各会議や出席管理から成績処理に至るまでタブレット型情報端末を利用した新しいシステムに移行する準備を始める。</p>	<p>（このセルは斜線が入っている）</p>	<p>（このセルは斜線が入っている）</p>	<p>本年度内で、教務の新システム導入が完成した。今後は新指導要領改訂に対応するための改良を重ねていくことになる。教務担当教員には、人員減の中、多大なる尽力をしていただいている。</p>
<p>VII. 危機管理</p>	<p>危機管理</p>	<p>(1)大地震を想定した危険回避訓練を、教職員で検討する。また食料・水等の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対策について検討する。</p> <p>(2)地域の避難所としての対策を検討する。重要情報・個人情報の管理の対策を行う。</p>	<p>43. 学校の地震をはじめとする防災への備えは進んでいると思うか。</p>	<p>81%</p>	<p>地震を中心とした防災への備え、避難訓練等、取り組みは進んでいる。非常食、水の備蓄、非常電源の確保、簡易トイレ等、購入を進めた。今後も地域と協力して計画的に進めていく。3月には中央区と連携協定を結んだ。</p> <p>今春の新型コロナウイルス感染症対策などは、現対応策を時系列で記録保存しており、事後に検証することとなる。</p>
<p>VIII. 施設・設備の保</p>	<p>施設設備の改修</p>	<p>・高校北・東校舎外壁補修工事を行う ・その他の施設について、整備等、優先順位を決めて工事の計画を進める。</p>	<p>45. 校舎、校庭、グラウンド等の施設設備の保全、補修、整備について必要に応じて、計画、実施されていると思うか。</p>	<p>74%</p>	<p>高等学校北校舎・東校舎外壁補修を1学期までに終了した。また、3月末には体育館の床張り替え工事を行った。毎年、経年劣化による補修工事は続いている。計画的な実施の間隙を縫って、直ちに必要な補修に追われている感があるため、このような評価になっていると考えられる。</p>

全と充実					Windows10への移行措置に伴い、MM教室のPCを入れ替え、また、全教職員のPCも同様にOS入れ替えを行った。
IX. 教員の労務環境改善	教員の労務環境改善	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1週1日の研修日の維持改善に努め、より働きやすい職場にしていくよう努力する。 ・ 育児短時間勤務を3歳から小学3年生までと改訂。 ・ 今後は介護休暇についても検討を進める。 ・ また、出勤管理のIT化にも検討を進める。 	44. 一週一日の研修日をはじめて3年目になるが、その方策も含め、労務環境の改善は進んでいると思うか。	57%	1週1日の研修日制度は、教員の休日を確保する上では有効であるが、当然のことながら、生徒教職員全員で一斉に取る休日とは違うので、教職員間の連携、クラス・学年・教科間の情報共有が不可欠となる、また臨時の会議をすることが難しく、定例の会議の回数も限られるなど、負担のお大きい制度であり、一概に労務環境が改善されているとは考えにくい。そのためこのように芳しくない評価になっていると考えられる。教育効果の面からも再考が必要である。
X 経費削減と効率化	経費削減と効率化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中高大短、法人の事務の一元化を適宜進める。 ・ 諸経費の見直し、管理部門の経費削減と効率化を図る。 ・ 補助金制度を有効活用する。 			各部門の経費の健全化に努めている。施設使用の不注意からの設備の破損の修理、印刷物等のチェックミスによる訂正、再作成が複数回起こった。事故につながるものがなくてよかったが、チェック機能を確認しつつ、丁寧に無駄を省いていきたい。